

## 2023 年度 研究室活動記録

### オープンラボ記録

本年度のオープンラボはオンライン・対面併用のハイブリット形式で行われ、院生によるコース紹介と個別相談を実施した。

#### <実施概要>

◆日時：2023 年 5 月 24 日（水）15:20-16:40

#### <コース紹介>

本田友乃（図書館情報学研究室）

染葉ことの（社会教育学・生涯学習論研究室）

### ワンデーセミナー記録

3 年ぶりの開催となった 2022 年度に引き続き、本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室的交流を目的としてワンデーセミナーを実施した。前半では各研究室の OB による対談・発表が行われ、後半では OB とコース在籍者の交流の場として座談会が設けられた。座談会では、教員や大学院生を交えて、様々な内容についての質疑応答が行われた。

#### <実施概要>

◆日時：2023 年 9 月 4 日（月）9:00-12:00

◆開催形式：オンライン

◆発表者：鈴木繁聡、丹田桂太、山田翔平

### 講義内容一覧

#### 【生涯学習論基本研究Ⅰ】担当：教授・牧野篤

本授業は、社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討およびフィールド調査によって、集団的に進めるものである。今年度はフィールド調査ができなかったが、文献講読と討議を中心に行われた。

今年度は「社会基盤としての社会教育再考」・「社会教育のとらえ返し」を大きなテーマとし、戦後に構想され、急速に社会に普及した社会教育・生涯学習の理念や機能に対して、どのような議論がなされ、それがどのような社会的な要請を背景にしていたのかについて参加した院生の要点提起が行われた。

授業では、牧野篤著『発達する自己の虚構：教育を可能とする概念をとらえ返し』を講読した。章ごとに受講者が文献の内容を整理した上、資料を参考しながら各自の論点および疑問点を発表する形式で議論を進めた。産業社会の価値である発達概念の省察、資本制社会の在り方、そして対自性と再帰性などのテーマをめぐって活発な議論が行われた。

#### 【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野篤、教授・李正連、准教授・新藤浩伸

本ゼミは、研究室に所属する院生・研究生が各自の研究を報告し、議論する場として開講されている。今年度からは、対面とオンラインのハイフレックス型で実施し、各回 1-2 名が研究報告を行った。

例年と同様、本年度の報告内容も多岐にわたっていた。それぞれの研究内容を聞くことで、新たな視点や、自身の研究への示唆を得ることができた。また、報告者自身も、多様な質問や助言を受けることで研究の課題を明らかにすることができた。

教員からは、検討すべき文献の紹介、研究手法、研究に対する考え方など、多岐にわたる指導がなされた。特に、論文を書くうえで重要となる、論点の設定方法や、前提となる考え方については、多くの院生・研究生に共通して必須となるものであった。本ゼミでの活動を通じて、院生・研究生は、自身が何を論じようとするのかを改めて自問する機会と、研究における新たな思考・認識の枠組みを手にする機会を得た。

#### 【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦峯

本講義は図書館情報学の学習を交流する場である。基本的に隔週で開催される本講義におい

て、毎回 2～3 名の図書館情報学研究室所属大学院生が各自の研究について進捗発表をする。発表者は研究員の教員及び他の院生から質疑を受け、本講義参加者は図書館情報学研究分野での研究方法・研究内容について相互理解を深めるため相互交流する。発表者の研究テーマは多岐にわたり、大きく図書館系と情報系に分かれる。例として図書館系では日本の公共図書館読書相談サービス、公共図書館目録事業、大学図書館員の専門性、大学ラーニングスペース、パスファインダーの役割についての研究などが挙げられる。情報系では「情報」という概念をめぐる、言語学ではなく図書館情報学視点からの翻訳や、専門語彙と関連するコーパスの構築や、言語構成技術および理解の技術と関わるテーマがある。また、例年通り修論検討会が開催される。

**【図書館情報学論文指導】担当：教授・影浦峽、准教授・河村俊太郎、講師・宮田玲、客員准教授・池内淳**

論文指導は各院生がその担当の指導教員と個別に行った。各院生は研究の進捗を資料にまとめ、指導教員から内容及び研究の進め方に関する指導を得た。修士論文を執筆したほか、院生は進捗に応じて論文投稿を行った。また、M1 と D1 の研究ゼミでは、文献検索やスケジューリングなど、具体的な研究進行方法を学び、修論や博論の第 2 章に相当する関連研究のレビュー論文をまとめるスキルを磨くことが主な活動となっていた。

**【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦峽**

本講義の目的は、研究員のメンバーが研究を進める上でその道具立てとして必要となる方法論を身につけることである。本年は技術系、対人実証系、記述系の 3 つのグループに分かれ、それぞれのグループで研究内容に必要な方法論を学んだ。1 つ目の技術系グループでは、主に自然言語処理技術を用いて研究を行うメンバーを対象に、自然言語処理技術を概観するべくウェブ上で公開されている言語処理 100 本ノックの勉強

会を行った。2 つ目の対人実証系グループは、対人実験やインタビューを研究手法として用いるメンバーで、大谷尚著『質的研究の考え方』を輪読形式で購読した。担当する章に対して事前にレジメを用意し、テキストの内容や内容に対する質問、自分の研究で活かせることについて発表を行った。記述系では、言語表現を観察しその様態を記述する研究を行うメンバーが集まり、M. Foucault 著 A. M. S. Smith 訳 *The Archaeology of Knowledge* の輪読を通じて、文書を言語表現どおりに読むとはいかなることか、言語について記述するとはどのような言語表現を構成することかを学んだ。

**【生涯学習論特殊研究Ⅰ】担当：教授・李正連**

本授業は、社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討を中心として進められた。今年度は、対面参加を基本としつつ、オンライン参加も可能とするハイブリッド形式で行われた。

授業の内容としては、『共生と自治の社会教育』（辻浩，2022）『地域社会におけるウェルビーイングの構築』（松田武雄，2023）を扱い、地域づくりと福祉につながる社会教育の歴史と今後の可能性について一緒に考察し、日本の生涯学習における今後の課題について議論した。

今年度の授業では新しく進学した修士課程の参加者が多かったため、生涯学習における新鮮な意見とこれまでの経験を豊富に話し合う時間となった。

**【生涯学習論特殊研究Ⅱ】担当：准教授・新藤浩伸**

本授業は、文化を学ぶ場所としての文化施設および大学の役割に注目し、文献の講読と検討を中心に進められた。発表者がレジメをもとに要約と感想、論点を発表したのち、各受講生がコメントシートを共有するかたちで議論が行われた。今年度は対面を基本とし、オンラインで

の参加も可能とするハイブリッド形式で開講された。講読文献は下記の3つである：

1. Tonette S. Rocco, M Cecil Smith, Robert C. Mizzi, Lisa R. Merriweather, Joshua D. Hawley eds., *The Handbook of Adult and Continuing Education*. New York, Routledge, 2020.

2. Edward W. Taylor, Marilyn McKinley Parrish eds., “Special Issue: Adult Education in Cultural Institutions: Aquariums, Libraries, Museums, Parks, and Zoos,” *New Directions for Adult and Continuing Education*, vol. 2010, Issue 127, 2010.

3. Darlene E. Clover and Kathy Sanford eds., *Lifelong Learning, the Arts and Community Cultural Engagement in the Contemporary University: International Perspectives*. Manchester, Manchester University Press, 2013.

主要講読文献である文献2は、アメリカにおける文化施設について論じられたものである。各受講生の関心に引き付け、本文で論じられていない劇場についての議論や日本の文化施設との比較検討が行われた。他コースの院生の受講もあり、それぞれの研究関心を共有しつつ、学びの場としての文化施設について議論を深めた。

#### 【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田節之

「プログラム評価論」が対象とする「プログラム」とは「何等かの問題解決や目標達成を目的に、人が中心となって行う実践的介入」を指す。従って、商業的な事業ではなく、何等かの社会貢献・社会課題の解決あるいは教育的な目的を掲げた実践的介入としてのプログラムについて、その結果や効果を評価し、活動の質的向上につなげるための方法論を学ぶ。

授業は講義と小グループでのワークショップから成る。各自が参加・関与しているプログラムの具体例を共有した上で、各グループでそれぞれ取り上げるべき事例を選ぶ。今回の授業では、2グループのうち一つが高校での新しい教育プログラムを、他方のグループはあるNPOの支援プログラムを選び、それらのプログラムに関して評価のためのフレームワークを適用し、プ

ログラムの問題分析、ステークホルダー分析、ロジックモデルの作成などを実施した。このような実習を通して、プログラムの様々な要素を言語化し、整理し、活動の効果や課題を評価する方法論を学んだ。テキストとして『プログラム評価：対人・コミュニティ援助の質を高めるために（ワードマップ）』（安田節之著、2011年）を使用した。

#### 【排除型社会におけるコミュニティ、労働、学習】非常勤講師・大高研道

本講義は、【Jock Young. 『排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異』 [The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity. SAGE Publications Ltd, 1999] 青木秀男, 伊藤泰郎, 岸政彦, 村澤真保呂訳, 洛北出版, 2007】の文献講読を通じ、後期近代の包摂型から排除型社会への移行のプロセスと要因、行く先を概観し、そうした社会の現状に対処する概念としての「コミュニティ」の姿およびその再編の方向性、それらと密接な関連を持つ労働や学習のあり方について検討を行った。各章の担当者からの要約と疑問・論点の提示をもとに議論を行うとともに、授業の前半においては各自の研究構想の発表と質疑応答の時間を持った。他研究科・他コースの学生の参加も複数あり、各自の専門とする視点から、現代社会の様相と、そこにおけるコミュニティ形成の困難さや可能性をめぐって活発な議論が行われた。

#### 【情報媒体構造論】担当：講師・宮田玲

本講義では、「読む」・「読める」とはどういうことかという問いを念頭におき、テキストの輪読を通じて、読む対象の特性とそれを読むための技術をメタ的に整理する試みを行った。講義の前半では、自然言語処理分野の教科書である、Dan Jurafsky and James H. Martin 著 *Speech and Language Processing*. 3rd ed. Draft (2023)（当該文献の第3章、5章、6章、7章。以下、テキストと呼ぶ）を輪読した。受講生が事前に内容をまとめた資料を作成し、講義内で担当者が内容の発表を行い、理解の確認を行った。講義の後

半では、読みの技術及びテキストで用いられている説明の技術を振り返った。テキストの内容が分からなかったとき、それを「読めた」という状態にするために何を行っていたかという問いを手がかりに、各受講生がテキストを読む際に発動していた技術を、例えば「記号の表記を確認する」、「複雑な図が出てきた場合、簡易・同型の図をテキストの別の箇所から探す」等、具体的な手続きのレベルで列挙した。

#### 【図書館情報学理論研究】担当：准教授・河村俊太郎

本授業では、図書館情報学に関わる博士論文や卒業論文で作成した本の購読を通じて、文献の内容を理解するとともに、文献の読み方や、論文の書き方などを学んだ。購読した本は、『公立図書館における指定管理者制度』、『養護教育の社会学』、『読書の歴史を問う：書物と読者の近代』、『書物の日米関係』、『近代日本における読書と社会教育』、『越境を経験する』である。

具体的には、受講生が担当する本に対して、事前にレジュメを用意して発表を行い、発表した受講生自身がわからなかったことや他の受講生がわからなかったこと、文献の書き方や内容に対する意見を、議論を通して討論していった。

#### 【図書館情報学特別講義】担当：客員准教授・池内淳

本講義では、「現代における図書館の諸問題」をテーマとして、教員による講義と受講生によるプレゼンテーションが行われた。講義では、図書館をめぐる 2022 年・2023 年の潮流が解説されたほか、図書館の機能、図書館による選書、図書館と書籍の売上の関係に関する問題提起がなされた。受講生は講義を通じて図書館に関する現代の動向に関する知識、図書館を研究・検討する際の視点を得た。また、演習課題を通じて、図書館に関するアンケート調査を設計する際の留意点を学んだ。プレゼンテーションは、各受講生が現代の図書館に関わる論点を提示し、それについて授業内でディスカッションするという形式で進められた。紹介されたテーマは

「図書館は寄贈を積極的に受け入れるべきか」  
「情報リテラシーは図書館情報学において、スキルとして捉えられるべきか、社会的実践として捉えられるべきか」等である。ディスカッションに対し必要に応じて教員が補足説明を行った。

#### 【分類科学特論】担当：非常勤講師・網谷祐一

この授業は、生物分類学を中心とする各トピックの解説と、それらを巡るさまざまな議論の考察を通じて「分類すること」一般についての理解を深めることを目的とした授業であった。授業形態は集中授業で、対面とオンラインの組み合わせにより行われた。授業は、各回とも講義とその後、全員でのディスカッションを中心に進められた。

授業ではまず、生物の命名法など生物分類学の実践的な解説から始まり、文化人類学や心理学では分類をどのように捉えているか、次に古代ギリシャから近代、ダーウィンから 20 世紀の各学派へとつながる生物分類学の歴史を整理した。後半は、生物分類学における重要なテーマである種とは何か、種の定義についての議論（種問題）に関して掘り下げた。そして、周期表における分類の特徴、自然分類や人為分類における分類の目的とは何かなどのトピックを考察した。全体を通して具体的な生物の事例などが豊富に紹介され、理解の助けとなった。図書館情報学における分類とは何かを考える上で示唆に富んだ授業であった。

#### 個人研究活動報告

（図書館情報学研究室 博士課程）

〔森山光良〕

日本の公共図書館の総合目録事業はこれまでどのように機能してきたのか、今後効果的に機能するにはどうしたら良いのかという 2 つの問いを立て研究を進めている。その研究過程で、地方の基礎的自治体管下の図書館によって広域で形成される連携機能についての定量分析と、そこで評価された連携機能を都道府県域で活用す

る可能性についての制度分析を行った。当該研究成果は、「システム統合と域内資料搬送網によって形成される地方の公共図書館ネットワーク一定量分析と制度分析を通じた考察」というタイトルの論文で、『日本図書館情報学会誌』vol. 69, no. 3 に掲載された。今後も引き続き、上記問いの答を探っていく。その際、分析の視角に、総合目録の編成方法および、図書館協力の仕組みを据えて取り組む。

〔福永智子〕

博士論文のテーマは公共図書館の読書案内サービスであり、(1) 読書相談サービスの制度的研究と(2) 読書相談質問の分析による利用者ニーズの研究からなる。今年度(1)では、読書相談サービスが日本の公共図書館界でなぜ排除されてきたのかを明らかにするため、読書指導と読書相談の関係に着目し、歴史的に整理する作業を進めている。(2)では、査読論文の執筆に取り組んだ。人々が文学作品を探す手がかりを記述し、レファレンス質問との違いを明らかにすることを軸に、実際の読書相談質問の集計と分析作業を進めた。年度内に執筆を完了させ、『日本図書館情報学会誌』に投稿する。

なお、12月に中国・四国地区図書館地区別研修(文部科学省・島根県教育委員会主催)の講師依頼を受け、島根県立図書館を訪れた。2月には富山県立図書館でも県内職員研修の講師依頼をいただき、読書相談サービスは、公共図書館の現場において一定程度関心が高いと思われた。

〔曾加〕

今年、サブジェクトライブラリアンの利用者ニーズに関する研究を進めてきた。まず、サブジェクトライブラリアンを対象にした英語と日本語の文献に対する文献レビューを行い、「大学図書館のサブジェクトライブラリアンを対象とした研究の現状と課題-英米と日本の比較を中心として-」と題するレビュー論文をまとめ、投稿した。また、修士論文も修正し、「大学内の他のサービスとの比較から見たサブジェクト・ライブラリアンへの大学院生が持つニーズについて

—東京大学大学院教育学研究科を事例にして—」と題してまとめ、現在投稿の準備を進めている。最後に、今年は博士論文の執筆も進め、博士論文の第1章に含む研究背景や研究目的などの内容を整理した。

〔名倉早都季〕

昨年度に引き続き、博士論文執筆に向けて研究を進めました。本年度は主に、先行研究において論じられてきた、論理的な表現を構成するスキルに関するレビューに取り組みました。論理的に表現できることを検討した論文や、論理的に表現することを評価した実証研究を取り上げ、既存の教育学研究が論理的に表現することをどのように捉えてきたかを整理しました。研究成果は、2023年6月の日本図書館情報学会春季研究集会で発表しました。今年度中の論文投稿に向け、レビュー論文の執筆を進めています。

また、公共図書館と情報リテラシーに関する研究を行いました。公共図書館が涵養すべき情報リテラシーを定義・検討した論文を対象にレビューを行い、情報リテラシー概念の捉えられ方、リテラシーが必要となる問題設定、リテラシーに関与する主体の属性、関連概念との関係を明らかにしました。研究成果を『生涯学習基盤経営研究』に投稿し、採択されました。

〔姚依辰〕

今年度は昨年度に引き続き言語を読む技術に関する研究を行った。

今まで、「読むスキル」は心理学や教育学で対象とされたが、どれも読むことを扱う時に言語学から出発し、読むスキルの外在化や一般化はできない。さらに、本来「読むこと」は図書館情報学の研究対象であるべきだが、図書館情報学が読む研究における位置付けがはっきりされておらず、図書館情報学の基本研究単位である「ドキュメント」の概念が読む研究の中ではほぼ無視されてきた。このように、今年度は主に「読むスキル」に関する研究の現状を明らかにするために、文献レビューを始め、関連する作業を行なった。その文献レビューの一部の

成果を「大学生における「読む」ことをめぐる課題とはどのようなものか」という表題で6月の日本図書館情報学会で発表した。さらに、12月のA-LIEP (The Asia-Pacific Library and Information Education and Practice Conference) では指導教員の影浦峽教授との共同研究としてテーマ「The Question of Reading: A Documentational Perspective」(読むことに関する課題：ドキュメントの視点から)を発表した。

〔胡瑠〕

今年度4月より博士課程に進学し、大学図書館における学習館について研究を行った。年間を通して研究ゼミに参加し、研究を進める上での具体的な手続きを学びつつ、博士論文の構想をより明確にすることに取り組んだ。「物理的な空間としての大学図書館がないと、何ができないか」という研究課題を設定し、具体的に、1960年代の東京大学近代化改革から現在に至り、総合図書館と部局図書館を含め、東京大学構内のラーニングスペースの変遷を整理するために、『東京大学附属図書館報告書』、『東京大学百年史』などの東京大学のラーニングスペースに関する史料を検討し、文献調査を行った。研究発表として、12月にA-liep2023にて修士研究の成果を投稿・口頭発表“The Development of Learning Spaces in University Libraries Based on Changing User Needs”を行った。また、レビュー論文の執筆に向けて、大学図書館と知識を蓄積する場所に関する文献の整理、投稿に向けた準備を進めた。

〔中尾康朗〕

今年度4月に博士課程に入学し、博士論文の構想を始めた。図書館における情報サービスの評価と再構築という面から研究課題を考察した。具体的には、従来からある図書館の情報サービスの変遷を踏まえた上で、図書館という枠組みにとらわれず広く情報サービス一般から見た図書館とはどのような位置づけにあるのかも含めた概念整理を試みている。その上で、レビュー論文の執筆に向けた調査、分析を進めた。並行して参加した図書館情報学理論研究では、博士

論文をもとにした図書の講読を通して、博士論文の構成法を中心に理解を深めることができた。また、分類科学特論では、分類すること自体の理論を学ぶ機会が得られ、自身の研究課題の概念整理を進める上で役立てることができた。今年度は、引き続きレビュー論文の完成と投稿に向けて作業を行っていく想定である。そして、次年度から情報サービスに関連したデータの分析を行い、特徴の確認を試みたいと考えている。

(図書館情報学研究室 修士課程)

〔黄心語〕

本年度は主にテキスト分析と修士執筆に取り組んだ。具体的には、原本①と二冊の訳本②と③を研究対象として選び出し、フェミニズム翻訳の視点から、異なった訳本に使用された女性語と四つのフェミニズム翻訳方略を比較しながら分析を行った。女性語の分析について、主に第二章と第三章における文末詞の使用に注目した。フェミニズム翻訳方略の分析について、全六章における前書き (Prefacing) と脚注 (Footnoting) の使用、第二章と第三章における補足すること (Supplementing) と乗っ取ること (Hijacking) に注目した。その結果、女性語に関して、②より③が頻繁に文末詞を通じて語り手の女性性を強調する姿勢が見られ、四つの方略に関して、二冊とも前書きと脚注の使用が観察されたが、③より②が補足することで原文における性差を暗示する表現を書き換える傾向が見られた。

① Woolf, Virginia, *A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929.

② Woolf, Virginia 『自分ひとりの部屋』 [*A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929,] 片山亜紀訳, 平凡社, 2015.

③ Woolf, Virginia 『自分だけの部屋』 [*A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929,] 川本静子訳, みすず書房, 1988.

〔本田友乃〕

本年度は、昨年度から引き続き、複数の翻訳間の差異を記述するためのスキームの洗練を行

うとともに、記述の効率化に向けて、翻訳文書対の分割の自動化に取り組み、修士論文を執筆しました。

スキームの洗練については、昨年度実施したスキームの評価実験の結果をふまえてスキームを改良し、改良後のスキームに対して、共同研究者の方々のご協力のもと2度目の評価実験を実施しました。また、昨年度実施したスキームの構築から1度目の評価実験までの内容について、ブルガリアで開催された HumEval'23 で口頭発表を行うとともに、スキームの構築から2度目の評価実験までの研究をまとめた論文を論文誌に投稿しました。

分割の自動化については、今年度も情報通信研究機構でインターンシップとして受け入れていただき、8月末より藤田篤氏のご指導のもと研究に取り組んでいます。研究成果については、2024年3月に行われる言語処理学会年次大会に向けて予稿を投稿し、発表の準備を進めています。

〔濱祐輝〕

本年度は、機械翻訳の評価用コーパスに専門用語タグを付与する作業に取り組み、その内容を修士論文にまとめた。修士論文では、機械翻訳において専門用語を評価することの重要性と、用語タグ付与作業に取り組むことの意義について、関連研究を通して明らかにした。また、作業対象コーパスに対する分析およびエラー修正作業の内容を元に、用語タグ付与のための基準を設定した。さらに、この基準に則って構築したコーパスに対して分析を実施した。本研究にて構築したコーパスのタグを含めた外部への公表に関しては、データ提供元の規定に従って、今後制度的な整備を進めていく予定である。

修士課程の2年間では、影浦峽教授をはじめとする図書館情報学研究室の皆様から、たくさんのコメント・アドバイスをいただき、多くのことを学ばせていただいた。ここに深く感謝申し上げる。

〔方超鳴〕

本年度は主に修士研究のデータ収集・分析と修士論文の執筆に努めた。修士一年目から始まった手法の再現実装が完成されたことにより、データ収集の方針、結果に対する分析ならびに考察の枠組み構築に力を入れることができた。修士研究は Web コンテンツの特性とその中で使用されている専門用語対訳対の位置付けとの関係解明を目的として、Web コンテンツという膨大な概念を適切かつ体系的に収集・分類するという思考・実践の中で多くの知見が得られた。Web コンテンツと一般的な紙媒体の相違点・特徴を認識しながら、専門用語対訳対の使用が示した異なる特性を量的・質的考察を行うことで、研究の目的を初歩的に解明したと同時に、研究の枠組みを検証・修正することができた。また、修士研究の成果は12月のA-LIEP2023で整理・発表したことにより、修士研究の見直しひいては修士論文の執筆も捗り、研究の内容だけでなく研究行為自体の向上に貢献できた。

〔藤井俊英〕

今年度より東京大学工学部から学際情報学府文化・人間情報学コース修士課程に進学しました。修士課程からは文芸翻訳の領域において機械翻訳がいかに利活用できるかという研究を進めようと考えています。そこで本年度はリサーチクエスションの策定や先行研究の探索、ならびに機械翻訳技術の学習に勤めました。研究ゼミにおいて研究の進め方ならびに先行研究探索の手法を学び、図書館情報学研究方法論において、自然言語処理技術を概観しました。現時点で修士論文の方向として、機械文芸翻訳を評価する際の評価指標を定めるということを目指に進めていこうと考えています。その一環として機械翻訳と人手翻訳を単語親密度という観点から比較する調査を行っています。また年が明けてからスウェーデンの KTH の方へ交換留学に行っています。技術的な知見を含め、経験を積んで来年度の研究活動に生かしたいと思います。

〔王琳倩〕

I began my master's program in October of this year and have primarily concentrated on two main tasks. Firstly, through literature retrieval and reading, I preliminarily identified the topic for my master's thesis, which focuses on exploring the relationship between interdisciplinarity and academic impact in the field of library and information science. Specifically, this research aims to investigate the interdisciplinary collaborations of library and information science with other disciplines and to examine the effects of the interdisciplinary nature on citation impact and disruptive innovation from the perspective of articles. Citation impact and disruptive innovation serve as two distinct indicators used to measure the academic impact of articles. Secondly, I synthesized indicators from earlier studies that measure the interdisciplinary nature, citation impact, and disruptive innovation of articles. Additionally, I initiated the process of learning data processing and analysis methods used in relevant literature to prepare myself for the upcoming research.

（社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程）

〔入江優子〕

本年は、出産に伴う2年間の休学を経て復学し、東京学芸大学こどもの学び困難支援センターでの勤務と並行して博士論文執筆に向けた調査を進めました。

今日的な教育福祉の再解釈に向けて、勤務先での不登校特例校（学びの多様化学校）・校内居場所における学びの評価に関する研究（文部科学省委託調査）と沖縄県名護市・浦添市等における学校と地域が連携した教育福祉実践に関する調査（科学研究費助成事業基盤研究C：分担研究者）を進めています。本年度は、これらの研究成果の一部を九州教育学会、日本社会教育学会において自由研究発表として行い、現在論文としての発表に向けて検討を深めています。

また、日本社会教育学会70周年記念事業出版『現代社会教育学事典（仮）』（2024年度刊行予定）の発行に向け、「第6章学校の再考・再生と社会教育のアプローチ 第8節チームとしての

学校とスクールソーシャルワーク」の項目の分担執筆も担当しました。

〔松尾有美〕

昨年度に引き続き、1970 - 80年代の韓国における共同育児運動に関する資料収集を行うとともに、今年度は、日本の大学入試制度や教育財政についてなど、社会教育・生涯学習以外の教育に関する調査報告書の執筆をする機会をいただいた。また、東アジア社会教育研究会から派生した韓国フォーラムの研究会に今年度も引き続きオンラインで参加し、韓国平生教育の1年動向において障がい者平生教育の部分を担当した。10月に開催された「日韓学術交流研究大会」には、当日の参加はかなわなかったが、学会幹事として事前準備等運営に携わった。

〔詹瞻〕

本年度も昨年度からの問題意識を引き継ぎ、中国上海での3年間の滞在中に収集した文献資料と現地調査結果を基に、20世紀初頭から現代に至るまでの中国における美術館教育の歴史と役割に関する研究課題を扱う博士論文の執筆を行った。また、博士論文の一部として、「中国の上海市における美術館と社区の協働の取り組み—上海の『芸術社区』プロジェクトにおけるコミュニティガバナンスの実践に着目して」という論文を日本教育支援協働学会の『教育支援協働学研究』Vol.5を投稿した。（現在査読結果待ち）博士論文の他の部分も引き続き執筆中である。そのほかの研究活動として、アジア教育学会第18回大会にて「中国における地域美術館と教育機関の連携による鑑賞教育プログラム—浙江省荻原美術館の連携事例を中心に」というテーマで発表を行った。

〔堀本暁洋〕

引き続き公共ホールの整備過程に着目し、地域住民との関わりや施設の持つ学習の機能について研究を行っている。施設整備に携わった自治体職員への聞き取りや資料の調査を行い、論文の投稿に向けた取り組みを続けている。



また、徳島大学にて公開講座を実施する機会をいただき、地域の子どもたちとともに楽器を作成する講座を実施した（2023年12月）。

そのほか、地域文化研究会への参加を通して表現・文化活動の実践について学び、文化施設や各地の取り組みへの調査を行っている。また、東京都文京区のNPO法人「街ing本郷」の活動に参加し、広報誌の作成などを行った。

〔林忠賢〕

昨年度に引き続き、明治期から戦前にわたって美術鑑賞教育の形成について研究を進めた。目による文明開化や殖産興業といった背景において、明治政府が主導した美術鑑賞は啓蒙や統制の意味で上から下へと展開し、「見る」という個人の行為に介入しようとしている。こうした文脈における鑑賞は必ず私的な行為や教育において陶冶の手段として認識されたわけではない。また、近代学校や公的機関における鑑賞は、新たな知識を得たいという目的に、特定の視点から世界を理解しようと促すこととなる。その一方で、「目の教育」については、学校教育や美術史の枠を超えて社会的な側面や、観客の出現に関する議論、そして民衆によってどのように語られてきたかを明らかにしようとして研究を進めている。これらの視点をまとめて投稿に向けて原稿を執筆している。

〔金亨善〕

昨年度に引き続き、日本のPTAの歴史研究を通して見た学校と地域の関係及び住民自治の論点について個人研究を進めている。戦後の教育改革の中で学校教育の変容に関して、子どもの自由な教育活動を保障する時間としての「自由研究」科目はどのような成果と課題があったのかについて考察し、韓国比較教育学会誌に載せている（Kim, Hyounghun.(2023).“How can children's individuality be developed in schools?: the challenge of postwar ‘Free Study’(Jiyu kenkyū) subject in Japan” *Korean Journal of Comparative Education*, 33(2), p.63-87.）。さらに、占領期のPTA像について、教育

自治の基盤となる可能性は当時どう語られていたかを、博論としてまとめている。

その他、引き続き立正大学及び関東学院大学で非常勤講師として勤めながら学部生と生涯学習について学び合い、日本女子大学では韓国に関する様々なテーマについて教えている。また、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」の運営委員会や TOAFAEC（東アジア社会教育研究会）の韓国フォーラム等にも継続して参加している。東アジアを中心とする学術交流大会等では、通訳としても参加している。

〔田中小百合〕

今年度は研究テーマの捉えなおしを行い、ひきこもりなどの若者を支援する活動に関わる支援者が自らの実践に抱いている意識、および、実践を通して支援者側にもたらされる学びをインタビューにより明らかにすることを目的に研究を進めている。インタビューは心理的侵襲発生の可能性があるため、倫理審査専門委員会の承認の上で実施している。それらから得た考察の一部を、日本カウンセリング学会にてポスター発表、日本キャリアカウンセリング学会にて口頭発表、日本発達心理学会にてポスター発表（2024年3月開催）するに至っている。インタビュー調査による分析を継続中であるが、研究で得た考察を学会誌に論文投稿することを目的に準備を進めている。

〔楊映雪〕

昨年度に引き続き、研究関心である中国の社区教育について研究を進めた。今年度は、地域活動における住民参加の意識向上に焦点をあてて、コミュニティのエンパワメントの視点から、コミュニティベースの学びが住民の社会参加の意識変化に与える影響を分析し、社区教育が住民の主体的な社会参加に果たす役割について探究した。その成果は CIES 2024 にて発表する予定である。しかしながら、3年間のコロナ禍の影響により長期的な現場調査の実施が困難であり、データの収集と分析が不足している。そのため、今後も継続的にデータ収集・分析を進

め、都度論文として研究成果をまとめていく予定である。

その他、今年度も当該課題に関連するテーマをめぐり、学会発表で積極的に国際交流を行った。「地域活動と子どもの食育」、「オンラインツールを活用した地域活動」というテーマで事例紹介を通して、日本、シンガポール、および中国を比較しながら、東アジアの研究者との意見交換を積極的に行い、今後の研究において知見を得ることができた。

〔豊田明子〕

今年度も、植民地台湾における実業補習教育と民衆の生活との関係を検討するための資料収集と読み込みをおこなった。その研究成果の一部は、昨年度のアジア教育学会で発表したものをまとめて論文化している（“植民地台湾における農業補習学校の卒業生導”『アジア教育』vol.17, 2023.11, p.56-67.）。とくに今年度は内地の実業補習教育に関する論考や帝国主義や国民国家についての基礎文献を併せて読むことで、当時の時代の雰囲気についての自分の中のイメージを豊かにすることを試みている。

なお本務校（名古屋柳城女子大学こども学部）では、保育者志望の学生だけでなく、子育て支援活動や保育者に対する講習会にて、年齢や興味関心の多様な者を対象に保育や子ども理解に資する知識や技術を伝えているが、そこでの実感はやはり、生活に根付かない知識や技術は枯れる、ということである。

この「生活を基盤にもつ実践の強さ」を心に留めながら、引き続き研究を進めていきたい。

〔鷲尾和彦〕

2023年9月に博士研究対象であるオーストリア地方自治体（市長室、文化・教育局等）への現地視察、資料収集及び関係者へのインタビュー調査を実施。また現地で開催されている文化教育事業にもパンデミック発生から約3年ぶりに参加し、世界各地からの参加者への取材（事後オンラインインタビュー含む）が叶った。あわせて、オーストリア成人教育センター・アーカイヴ

（Österreichisches Volkshochschularchiv）での資料収集、取材も実施した。成果を踏まえ引き続き研究と論文執筆を進めている。また今年は、欧州都市の都市政策（デジタル・インクルージョン政策、オンラインを活用した市民・行政・教育機関の協働プラットフォームづくり等）についてスペイン、デンマーク等の欧州都市でのリサーチを行った。この成果は日本都市計画学会の学会誌等への寄稿、また東京大学未来ヴィジョン研究センター研究ユニット参加メンバーによる共著（2024年刊行予定）に収録される論稿として執筆した。

（社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程）  
〔横山詢〕

昨年度10月からの休学を終え、本年度9月に復学し、修士論文「大宮盆栽村の成立期に見る住民自治のダイナミズム—関東大震災前後の思想形成を手がかりとして—」の執筆に取り組んだ。大宮盆栽村に関する歴史的資料の収集と、同時代の思想に関する文献整理を、執筆終了まで同時並行で続けることになった。その結果、先行研究ではほぼ顧みられることのなかった関東大震災前後、そして明治後期・大正・昭和初期の思想から大宮盆栽村を分析することで、新たな歴史的位置づけが見えた。そして、そこに起こっていた自治活動のかたちを間接的に浮かび上がらせることに成功した。

本年度4月からは東京大学発の盆栽サークルに参加し、盆栽を基点とした関係づくりに自分自身も巻き込まれることになった。他大学・他地域で盆栽を愛好している団体とのコラボレーションも計画中であり、これをきっかけとしてさらなる研究活動・実践活動につなげていけるようにしたい。

〔染葉ことの〕

今年度は、本紀要『生涯学習基盤経営研究』へ投稿する研究ノートと、修士論文「『大人リーナ』の語りを通じた『大人バレー』研究：D. ジョーンズおよび R. ステピンスの論を援用して」の2点の執筆を行なった。

研究ノートは、昨年度より進めていた理論的先行研究レビューをもとに執筆されたもので、アマチュアの表現活動の分析に向けた新たな理論的枠組みを考察したものである。修士論文では、日本国内において 19 歳以上の大人がバレエを習う活動、「大人バレエ」を実践する女性、「大人リーナ」11 名の語りの分析を通して、「大人バレエ」における相互作用による文化と自己の形成のプロセスを明らかにした。さらに、文化と余暇の新たな理論的枠組みを提示した。

暗中模索で始めた研究が形となって安堵した一方で、研究手腕の未熟さ、特に分析・執筆力の乏しさを自覚させられた。今春より大学院での研究生活を離れるが、今年度の反省を活かして引き続き勉学に励みたい。

〔岡田卓朗〕

本年度から若者向け就労支援施設（サポートステーション）でのボランティアを開始した。若者向け就労支援施設でのボランティアは、論文執筆のための調査だけではなく、自身の研究動機を振り返る機会にもなった。

修士論文については、研究関心である「日本のキャリア観・キャリア教育の問題」を踏まえ、「日本の若者向け就労支援政策におけるキャリア概念の検討」をテーマに執筆した。論文を執筆するにあたり、まず研究におけるキャリア概念の変化と、日本の政策上におけるキャリア概念を整理した。次に、サポートステーションを利用し就労した若者の語りから、彼らが就労する上で何が課題であったのか、何が重要であったのかを明らかにし、彼らが自身の人生・職業人生を築く上で必要となることを整理した。その後、各省が提唱するキャリア概念と若者の語りから見えたことを比較し、新たなキャリア概念の考察を行った。

また、仕事で携わっている日本企業の若手向け人材育成に対しては、研究で得た知見を踏まえ、人材育成の新たな在り様を模索しようと試みた。

〔大磯恵子〕

本年 4 月に修士課程に入学し、修士論文の構想を練りつつ、学部や他領域も含めて幅広く授業に参加した。研究テーマとして「プレ・リタイアメント」と呼ばれる現役引退前の時期、あるいは引退というトランジションの渦中に生じる学習ニーズに関心を持っており、この時期の発達課題に対応するための支援的介入のあり方を探りたいと考えている。その際、芸術作品の対話的な鑑賞法や、鑑賞によって生起するナラティブに着目したいと考え、鑑賞教育について学ぶため、東京都美術館でのアート・コミュニケーターとしての活動を続けている。また、鑑賞教育に関する読書会や「美術による学び研究会」のフォーラムに参加し、非言語的な表現を対話的に鑑賞する方法論や実践についても学んでいる。

〔上岡稀生子〕

今年度から修士課程に進学した。住民による地域課題解決における学びをテーマとして、卒業論文に引き続き、東京都板橋区の NPO 法人において参与観察を行っている。活動の記録や企画に関わり、住民同士のやり取りや、個々人の語りに触れる中で、参加期間の長い住民に共通する「学び」観、「活動」観が見えつつある。また、実践を通して住民が見出したこの「学び」観をより深く捉え、研究の視座を定めるために、社会教育学の中で捉えられてきた学びのあり方を、文献を通して再確認している。

その他、2023 年度日本公民館学会スプリングフォーラムで板橋の実践報告の一部を担当し、その後プログラムの報告として、【上岡稀生子 “〈プログラム 1「SDGs を地域で推進するために公民館(社会教育施設)が果たすべき役割」〉記録とまとめ”『日本公民館学会年報』vol.20, 2023, p.143-145.】を執筆した。また、卒業論文を再構成し、2023 年度東京大学教育学研究科紀要に“学び合いを土台とした住民活動の発展—板橋区の住民活動に着目して—”と題して投稿、現在校正作業に取り組んでいる。

〔林知里〕

本年度より本研究室の修士課程に入学し、専門である社会教育学・生涯学習論に加えて、研究関心に近い教育行政や教育社会学、社会教育士の資格取得に関わる授業を幅広く受講した。また、日本社会教育学会の6月集会（関西）、研究大会（オンライン）に参加し、研究の最新動向を知ることができた。

研究活動としては現在、課題意識と研究の目的を行き来しながら、自分が本当に問いたいリサーチクエスションの明確化を行っている。その中で修士論文では、高校生が学校から社会へ越境して学ぶことによる自己認識や進路・キャリア意識の変容をテーマとすることを考えており、来年度に向けて基本的な文献や研究方法について検討している。

個人研究の他には、研究室プロジェクトとして、静岡県裾野市における富士山噴火を想定した防災と自治に関する TOYOTA 未来創生センターとの共同研究や、全国公民館実態調査にかかわらせていただいている。

（社会教育学・生涯学習論研究室 研究生）

〔孫銘〕

今年度は自身の研究を進めながら、修士課程進学に向けて試験対策を進めていた。まず、研究の視点として、日本と中国の地域づくり教育のアプローチについて比較研究を行っていたが、様々な先行研究を通じて、単純に日本のコミュニティスクールと中国の社区教育を比較することは困難であり、適切ではないと自覚していた。新藤先生の授業で読んだ柳宗悦の『民芸四十年』から民芸や伝統文化に関する教育に興味を持ち、今後は社会教育の視点からの体験に基づく伝統文化教育を中心に研究を進めたいと考えている。

そして、先生方と先輩たちのおかげで、修士入学試験に無事に合格することができた。この一年間、授業やゼミに参加させていただき、生涯学習・社会教育学に対する理解を深めつつ、自身の研究にも大きなインスピレーションを得ることができた。昭島市公民館多文化共生講座

企画にも参加し、企画者と講師として確実に社会教育活動に参加している。